

氏 名	居 關 友 里 子
学 位 の 種 類	博 士 (言 語 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 7612 号
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日常生活に生じる会話終結の記述—活動の連続からみる会話の組織—

主 査	筑波大学 准教授	博士 (学術)	澤田 浩子
副 査	筑波大学 教 授	博士 (言語学)	杉本 武
副 査	筑波大学 教 授	博士 (人文科学)	一二三朋子
副 査	筑波大学 准教授	Ph.D. (言語学)	高木 智世
副 査	筑波大学 名誉教授	博士 (言語学)	砂川有里子

論 文 の 要 旨

本論文は、日常生活で生じる会話の終結部分に焦点を当て、そこに見られる相互行為がどのように行われているのかについて記述を行うものである。本論文が目的としているのは以下の二点である。

- I. 日常生活の中で体験されている会話終結がどのようになされているのかについて、周辺の場面も含め記述を行い、先行研究の分析対象の偏りを埋める。
- II. 会話が活動の連続の中に生じているという視点を取り入れることによって、会話および会話終結に関する新たな知見を得る。

この二つの課題に沿って、本論文は次の8章によって構成される。

第1章では、従来の会話終結研究の潮流が示され、その中における本論文の位置づけが述べられる。さらに、本論文の分析のアプローチとして「エスノメソドロジー」「会話分析」の二つの手法が挙げられ、主要となる概念の定義と、扱う会話資料の概略が示される。

第2章では、会話終結研究でしばしば参照されるSchegloff & Sacks (1973)の記述（すなわち会話の終結は、「前終結」に始まり「最終交換」で閉じられる部分からなるという記述）が紹介され、それが記述的・応用的研究の中でどのように展開されているのか、幅広く論評されている。その上で、この記述はもともと電話会話の観察に基づくものであるため、電話以外の会話でも同じような特徴が観察されるのかは検証が必要だが、その後の研究で十分に検証されてきていないという問題点を指摘し、今後の会話終結研究の進展には、分析対象の偏りを埋めることが不可欠であることを主張する。

以降、本論として、第3・4章で事例研究を行った後、第5章でそれらを体系化し一つの視座を提示する。その後、第6章で新たな事例研究を追加することで、第7章でさらに大きな視座へと論を導き、論文全体の統括を行う。各章の概要は以下のとおりである。

第3章では、一つ目の事例研究として、日常会話の一つ＜立ち話＞を取り上げ、終結における相互行為を記

述する。＜立ち話＞の終結直前における発話連鎖を観察したところ、Schegloff & Sacks の記述でいう「前終結」が観察されないことから、終結直前よりもっと前から会話終結に向けた相互行為がなされていることを指摘する。そして、中心的な話題との対比の中で、最後になされた話題の性質が会話終結に寄与していることを論じ、終結を形成するための組み立てが、実際には会話全体に見られる組織においてなされていることを主張する。

第4章では、二つ目の事例研究として、役割や制度を志向して行われる制度的会話の一つ＜実習反省会＞について観察を行う。＜立ち話＞と同様に「前終結」が全く行われないものが観察され、やはり終結直前よりもっと前から終結に向けた相互行為が存在すると考える必要が出てくる。これについて、本論文では次の二つの要因を挙げる。一つは、談話標識、沈黙、話題を示すメタ的な表現など、現在の発話が会話のどのような局面にあるのかを示す「構造化の手がかり」、もう一つは、決まった順序で発話の機会が参与者に割り振られるなどの「実習反省会の構造」である。参与者はこの二つを対応付けることによって現在の位置を知り、会話が終結に向かっていることを認識できていると主張する。

第5章では、「会話の活動としての性質」に注目し、第3・4章で行った事例分析の体系化を行う。具体的には、事例を次の三つのタイプに分類したうえで、それぞれの終結の特徴との関連性を導き出す。①会話が場面の主要な活動であり、かつ具体的な目的を達成するための手段として生じている場面では、目的が達成されるのと同時に終結が生じる。②会話が場面の主要な活動であるが、手段ではなく交感を担っている場面では、コミュニケーションの充足に応じた会話全体の組織を参照して、終結が生じる。③主要な目的が会話以外の活動にある場面では、会話と同時に行われる主要な活動を参照して、その目的達成と同時に会話が終結する。以上のように、その場面が何を行う機会として生じているのか、それに対し会話がどのような位置付けを担うものかということが、会話終結の組み立てに大きく影響していることを示す。

ここまでは単一の会話内の活動を論じるものであったが、第6章では、再び事例研究として＜学外実習＞の談話を取り上げ、参与者の共在状況が継続する中で生じる会話について、その前後の活動との関係から終結を論じる。会話分析の視点を踏まえた記述を通して、一点ではなく時間幅を持って生じる境界があること、隣接した別の活動の開始や終結に依存して組織される境界があることを明らかにする。電話会話のように開始と終結が一点で見出され、会話内部で完結した組織を持つものが会話の典型であるかのように思われがちであるが、共在状況で行われる相互行為では異なる境界のあり方が存在することを主張する。

第7章では、本論文が扱ったすべての事例研究を振り返り、冒頭の二つの研究目的と対応付けながら、得られた知見を総括する。研究目的Ⅰでいう、先行研究の分析対象の偏りを埋めることについて、本論文で扱った分析対象の多様性を「参与者同士の接触の切断のあり方」「会話の活動としての性質」の観点から確認し、日常生活を構成する活動の一つとして会話を捉え、多様性を保証していく試みの重要性を強調する。さらに、研究目的Ⅱでいう、活動の連続の中で会話を捉えることについては、第6章の事例を第3・4章で扱った事例と比較し、会話終結研究では会話内部の組織に目が向けられることが多いが、会話の外側との関係の中で会話を捉える視点の重要性を指摘する。

最後に第8章では、本論文の成果をまとめ、会話研究や他領域への貢献と今後の展望について述べる。特に日本語教育との関係について、日常生活に生じる具体的な場面において、母語話者がどのように会話を組み立てているのかという情報が、学習者の会話教育においても応用できることを示す。また、会話をそれ自体で完結したものとして捉える視点に対し、外側から会話を捉える視点は、会話研究全体においても有用であることを主張する。そして、この視点の前提である、会話をその他多くの活動の一つとして捉えることは、日常生活を構成する一部として会話が担うものについて知る契機となることを展望する。

審 査 の 要 旨

1 批評

会話終結研究は、Schegloff & Sacks (1973)において会話の終結の組織のあり方が記述されて以降、おもに英語会話研究での進展を見たのち、日本語会話でも多くの研究者の関心を集め扱われてきたテーマである。Schegloff & Sacks の記述が 40 年以上たった今も、ある程度の普遍性を持って研究者に受け入れられていることは、この記述の有効性を物語ってはいるものの、電話会話のデータに基づいたこの記述が、人間が経験する多様な会話のあり方とどのように重なり、また異なるのかということについては、体系的に検証されてこなかった。そのような流れの中で本論文は、Schegloff & Sacks の記述を出発点としつつ、会話の多様性へと目を向けた点で独創的であり、さらには、人間の日常を構成する「活動の連続」の仕組みまで議論の射程に入れた点で非常に先取的である。Schegloff & Sacks の記述の主眼は、会話の終結に至る前の段階で、参与者同士による交渉が行われていることを示した点にある。しかし、その交渉は、終結の直前でのみ行われるわけではなく、会話の全体的な構造や話題の配列、会話と並行・前後して生じる活動、そしてその会話自体がどういう機会として生じたものかなどを参照して、より広域に行われるものであることを指摘した点が、本論文の大きな成果である。本論文は、現在の会話終結研究を大きく前に推し進める力を持った意欲的な論文と言える。

しかし、本論文の意義はその独創性や萌芽性にのみあるわけではない。それだけでなく、極めて謙虚に先行研究の知見を掬い上げ、それぞれの記述の有効性と限界を丹念に吟味しており、その洞察力と構成力にも本論文の秀逸さが認められる。その上で、これまで看過されてきた、「会話」は人間の「活動」の一部であるという視座の有効性は、事例分析の中で繰り返し実証され、会話終結の記述において具体的な知見を提示することに成功している。そこに論の飛躍はなく、会話分析の手法に忠実に則った記述が積み重ねられており、個々の事例研究の範囲で見ても、十分に高い評価の得られる研究となっている。

以上のような点で、本論文は、記述的研究としても理論的研究としても、会話終結研究における一つの道標となる重要な成果を含んでいる。さらに、会話をそれ自体で完結したものとして捉える従来の視点に対して、会話を前後の活動との関係の中で捉えるという「会話の外側からの視点」など、会話研究全体に問題提起できるようなアプローチが含まれている点も注目に値する。ただし、その部分において、現時点ではまだ「活動」と「会話」の関係に不明確な部分もあり、会話という現象の複合性を十分に記述できるような枠組みの提示に至っていないという難点はある。しかし、この点はむしろ本論文の持つ将来的発展性を示すもので、本論文の会話研究上の価値はこのような不十分さを補ってなお余りあるものであり、本論文の価値を何ら貶めるものではない。

2 最終試験

平成 28 年 1 月 26 日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。